



小林 孝嘉氏(高14)
電通大特任教授

島津賞受賞

島津製作所が設立した島津科学技術振興財団が、このほど科学計測の基礎研究で功績を上げた研究者として同氏を表彰した。

小林氏は柏崎高校第14回の卒業、東大理学部卒業、同大理学系博士課程修了。東大教授を経て現在電気通信大学の特任教授(量子・物理工学)市内東本町二の出身。

二〇〇九年度 同窓会文庫所蔵登録一覧

同窓生による書籍の贈呈が今年度もたくさん寄せられている。近年マスコミで大活躍されている問題な日本語の北原雄氏をはじめとして多くの先輩諸氏の著作が寄贈されている。今回その中の一冊「団塊の青春」中村一夫(旧姓・春日徳英(高19))著を紹介させていた。

- 「日本語のちやほや」 辺見じゅん著
「よく出てくる漢字」 わかりやすく朝日、読売、毎日、日経から新潮文春まで
「北原保雄の日本語セミナー」 北原保雄著
「建築の世紀・専門者論理からの脱却」 村田麟太郎著
「人間のうた」 人生の四季

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。



セミナーハウスより新校舎

- 「朝日新聞東京社会部OB会融人社編」
「技術開発の昭和史」 森谷正規著
「収容所から来た遺言」 辺見じゅん著
「中世十三湊の世界・よみがえる北の港湾都市」 青森県市浦村編・千田嘉博 編集協力
「十三湊遺跡 国史跡指定記念フォーラム」 前川要編
「北原保雄著 北原保雄著 行委員会編 春日徳英著」

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。



旧図書館・現セミナーハウス

『団塊の青春』

中村 一夫・著

旧姓・春日徳英(高19)



柏崎・羽羽の地名

今から数千年前縄文時代(あるいはそれ以前の旧石器時代)以来この柏崎地方にはしっかりと人々が生活してました。狩猟採集の時代から、稲作をはじめ、村をつくり古墳を築き、城を造って戦国時代を戦い、諸国と交易をし、新田開発をし、海を舞台に活躍しました。そして幕末戊辰の役を経験し、二度の世界大戦をくりぬけ、数度の不況を克服してきました。郷土に骨をうすめて教育にあたり、私財をなげ出して町につくした人、青雲の志を最後まで持ちつづけた人、学問に生涯を捧げた人等、めだたないけれども真摯に生きた多くの先人がいました。

「問題な日本語2」 続弾! なにが気になる? どうして気になる?
「問題な日本語3」 その3
「問題な日本語」
「人間のうた」
「人生の四季」

「団塊の青春」 春日徳英著
「北原保雄著 北原保雄著 行委員会編 春日徳英著」

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。



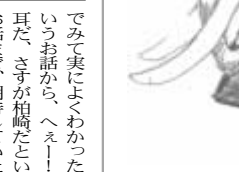
セミナーハウスより新校舎

柏崎郷土物語(1) 岩下 正雄(高16)

「柏崎」という地名は十五カ所あるそうです。市が一カ所、字(マザ)が九カ所、駅が三カ所、岬が二カ所となっています。一市はもちろんだ当市のこと、三駅は柏崎駅、東柏崎駅、三重県の伊勢柏崎駅、字名は岩手県遠野市、宮城県古川市、福島県相馬市、栃木県那須町、茨城県霞ヶ浦町、佐賀県唐津市、愛媛県内海村等、岬は長崎県松浦市、同三井楽町の二つです。柏崎姓も多くあります。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。



セミナーハウスより新校舎

株式会社 植木組
取締役会長 植木 康之(高15)
取締役社長 植木 義明(高23)
新潟県柏崎市新橋二番八号

株式会社 信工社
代表取締役 桑 山 秀 雄(高41)
柏崎市東本町三丁目四番三十号
TEL(025)7317317
FAX(025)7317317

新潟医・歯学同窓会
会長 阿部 春樹(高17)
幹事 植木 智志(高45)
有限会社 信工社
代表取締役 桑 山 秀 雄(高41)
柏崎市東本町三丁目四番三十号
TEL(025)7317317
FAX(025)7317317

馬場会計事務所
税理士 馬場 正人(高19)
〒946-0046 柏崎市四谷二丁目三十一番四
TEL(025)2161171

高桑内科医院
高桑 正道(高18)
柏崎市比角一丁目二一三
TEL(025)215555

会田内科医院
会田 恵(中41)
柏崎市東本町(保健所前)

高島内科胃腸科
理事長 高島 憲一郎(高13)
柏崎市扇町二丁目二十三
電話(025)0011

矯正歯科 小児歯科
矯正歯科 小児歯科
きたざわ 歯科
かみあわせ 研究所
北 澤 智 昭(高23)
柏崎市幸町一丁目 TEL(025)2262221

株式会社 植木組
取締役会長 植木 康之(高15)
取締役社長 植木 義明(高23)
新潟県柏崎市新橋二番八号

水地 学(高41)
柏崎市扇町二丁目四
TEL(025)7317317
FAX(025)7317317

株式会社 信工社
代表取締役 桑 山 秀 雄(高41)
柏崎市東本町三丁目四番三十号
TEL(025)7317317
FAX(025)7317317

馬場会計事務所
税理士 馬場 正人(高19)
〒946-0046 柏崎市四谷二丁目三十一番四
TEL(025)2161171



アフリカ象

筆者紹介
今号より「柏崎郷土物語」の連載をお願いします。
筆者の岩下正雄氏(高16)
市内外本町で廢物店を営んでおられますが、現在、は青海川の郷土玩具(八咫姫の家)館長をされておられます。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。

「団塊の青春」と言う本が書店に並んでいる。著者は春日徳英(高19)だ。著者は柏高を卒業した後法政大学に進み、昭和四十二年から四十六年にかけての正味四年間の学生生活を東京で送っている。著者のこの学生生活における原体験が発想の原点になっているのと思われ。